

# 「経国（世）済民」雑感

— 笠森伝繁と柳田國男をめぐって —

長谷部 八 朗

平成二五年四月、一年後に定年を迎えられる吉津宜英前所長の命を拝し、駒澤大学仏教経済研究所の所長の任に就いた。ふつつかながら、所員・研究員をはじめとする関係各位のご支援・ご鞭撻を賜り、本研究所のさらなる発展に向けて責めを塞ぐ所存である。拝命以来ほぼ一年の歳月を経たが、本号の「巻頭言」の場を借りて、まずは所長就任のご挨拶を申し上げたい。

加えて、私の個人的な事情を申し添えれば、同じく昨年四月より、本学の学生部長の職務を担うことになった。勢い繁忙な日々を迎えたが、幸いにもこの研究所の運営は所員・研究員のお力添えによって過怠なく年度を終えられた。とはいえ、研究所のメンバー、それも活動の中核を支えてこられたお二人の逝去という、思いも寄らぬ用事と向き合わねばならなかったことは、まことに痛惜の念に堪えない。七月二日に研究員の寺下英明氏、一月五日には吉津前所長が幽明界を異にされたのである。今はただ謹んで冥福円成の祈りを捧げるのみである。

さて、この小文を記すに当たり、標題のように本研究所の初代所長・笠森伝繁の名を冠したのは、所長を承ける

に際し、私自身改めて研究所の歴史を振り返ってみたいとの思いに駆られたことによる。もっとも、その断片的な記述は、本誌の既刊号に、折に触れ収められてきた。しかし、かかる沿革を体系的に通観する試みは未だなされていない。数年後に創立五〇周年を控えた現在、当研究所の来歴を十全に検証するのは困難かも知れないが、せめて概要については記録に留めておきたいと思う。その具体的な方途については今後講じることとして、以下では、笠森伝繁の遺した言説から、「経国（世）濟民」なる言葉を取り上げ、同氏の経済観の一面に目を向けてみたい。

そもそも私が、右の視点に立って笠森を論じようとした契機は、本学の『商経学会研究論集』第四号（一九六三）に収録されている「私の履歴書」と題した氏の著述にある。ちなみに同誌は、笠森と同僚教授、森莊三郎の兩人の喜寿祝賀記念号であり、そうした趣旨から、笠森の来し方が収録されたものと思われる。

その内容を大略記せば、次のとおりである。明治二〇年、石川県石川郡笠間村（現在の白山市西北部）に生まれた笠森は、やがて第一高等学校から東京帝国大学政治学科に進み、高等文官試験に合格し、一時農商務省に在籍したのち、大正三年神奈川県庁に入り、三年間奉職する。大正七年には、財団法人・啓明会の設立に加わる。学術研究の助成と実践を目的とした団体で、笠森自身、そこで農業経済の研究に携わったという。そして大正一三年、曹洞大学に赴任する。また翌一四年、大学令により大学認可され、曹洞宗大学から駒澤大学へと名称を改めるに伴って、人文学科が新設されると、笠森は同学科に籍を置くこととなった。さらには昭和二四年の新制大学移行に際し、商経学部が開設されて以降は、同学部の一員に名を連ねている。

この「履歴書」を閲読して、私が強く印象づけられたのは、次の二つの記述であった。ひとつは、中学生の頃、宗教や哲学に関心を持ち、詳しい経緯は記されていないが、一年生の時に「坐禅の真似事をはじめた」ということ。爾来、「禅心」を養うための工夫を重ね、大学卒業の年には「坐禅会」に参じ、一週間に亘る修行を体験したそうだ。

二つ目は、やはり中学時代、或る書物に、経済の語義は「経国済民」であると書かれているのを目にして啓発され、この学問を生涯かけて追求しようと決心したこと。これらのエピソードを、のちに笠森が駒澤大学に奉職し、かつまた大学付置の本研究所の草創期を担った事実と重ね合わせたとき、かれと当研究所との関係に何か奇縁めいたものを感じるのは、おそらく私一人だけではあるまい。

ところで、笠森の「履歴書」を読み終えた私は、時を移さず一人の人物に思いを馳せた。かの日本民俗学の先駆け・柳田國男である。笠森に先んずること一二年、柳田も同じく一高から東京帝大政治学科に進んで農政学を専攻し、卒業後は農商務省に勤めている。また、柳田自身は用いていないが、かれの学問の特徴を語る際、「経世済民」あるいは「経国済民」なる言辞はしばしば援用されてきた（藤井隆至『柳田國男 経世済民の学』一九九五、参照）。そのような柳田の学問観を端的に映し出した書が、昭和一〇年に刊行された『郷土生活の研究法』である。同書のなかで柳田は、「我々の学問は結局世のため人のためでなくてはならない」と説いている。ここでいうところの学問とは、もとより民俗学を指している。この書は、農政学から民俗学へと操舵してゆく「柳田学」の軌跡を理解する上で重要な鍵を握っているといえよう。それは、明治四三年に新渡戸稲造らと「郷土会」を結成し、大正二年に高木敏雄と雑誌『郷土研究』を発行するといった、「郷土」に関する一連の研究過程から生み出された成果であった。その際留意すべきは、敬虔なキリスト教徒で『武士道』の著者として知られる「郷土会」結成時の同士・新渡戸稲造が、実は農政学者なる、もうひとつの顔を有していた点であろう。そして、同会設立に向けた柳田と新渡戸の提携は、「なぜに農民は貧なりや」の言辞に象徴される「柳田学」の問題意識が、農村生活の微細な観察を通じた民政研究をめざす新渡戸の「地方学」と共鳴し得る内容だったという事実を端的に示している。

ここでさらに注目されるのは、一高時代の笠森が農学への関心を深め、また卒業後、東京帝大政治学科に進学し

て経済学を学んだのも、当時の校長であった新渡戸の感化・助言によるのだと述懐していることである。そうだとすれば、「郷土会」の活動を通して柳田と笠森の出会いがあったかも知れない。今後の検証が俟たれよう。

かくして、柳田の「経世済民」論は農政学から民俗学へ、一方笠森のそれは、農政学を専門としつつも、仏教と接合されてゆく。「履歴書」の中で笠森は、「農家の経済」と併せて、「禪と経済」の研究を終生の仕事と位置づけている。ちなみに、笠森が本研究所の所長に就任したのは、この「履歴書」を掲載する『商経学会研究論集』第四号が刊行されてから三年後であった。してみると笠森の所長就任は、かれの「禪と経済」研究というライフ・ワーク構想を進める過程で、一体どのような意味を有していたのか。笠森の年来の関心事である「経国済民」論が、禪・仏教の思想と如何に結びつけられたのか、あるいは本学（本研究所）の根本理念をなす建学の精神とどう接地されたのか。これらの問いは、先述した本研究所の沿革を再確認する営みの起点になると同時に、近代日本における、経国（世）済民論、農政学、民俗学の展開、そして禪・仏教と社会とのかかわりなどを考えるための重要な契機を提供するであろう。